

映画

ポスト3・11の道標 それは「ローカル」

斉藤円華

さいとう まどか/ジャーナリスト



「今、世界では『より生産性を高め、スピードをアップし、都市化を進めよう』『未来は消費を増やすことの先にはかない』などというストーリー（神話）が語られている。しかし、それらは私たちがするべき仕事でしょうか？ 農業、老人や子どもへのケアなど、本当に必要な仕事はたくさんある。ローカリゼーションは、私たちに必要な仕事をやり戻し、従来とはまったく違う経済の仕組みに置き換える運動です」

二月十九日に都内で開かれた発表試写会で、来日したヘレナさんは語る。映画は世界各地を六年にわたり取材し、各地でローカリゼーションに取り組み人々にインタビューを重ねて完成した。「制作の途中で、地域がグローバルゼーションに呑みこまれていく悲しい現実を目の当たりにしました。しかし大きな困難の中でも、人々は新しい社会のモデルを作ろうと努力している。一つひとつの小さなステップを積み重ねることで、ローカリゼーションは実現するのです」

ヘレナさんは代表例として、自然と

調和した持続可能な町づくりを目指すエコビレッジ、そしてピークオイル（石油の減耗）という世界的な事態の前に、石油に依存した生活から脱し、地域住民の創意工夫で生活力を高めるトランジション・タウンを挙げる。

ここでは、ローカルは閉鎖的な村落共同体を意味しない。ヘレナさんは、日本でローカルが単なる「田舎暮らし」を意味しがちな点を踏まえ、こう話す。「ローカルとは具体的な地域に限定されない。それはディレクション（方向性）なのです」

つまり、ローカルとはグローバルゼーションで分断された人間同士を、地域にとどまらないコミュニティにおいて結びつけることだと言うのだ。このコミュニティは閉じたムラではなく、外に、世界に開かれている。

今度の震災でも、被災地では機能不全の経済システムに代わってコミュニティがいち早く被災者に手を差し伸べ、支え合っている。映画が示した未来と、廃墟の中から立ち上がるコミュニティが見事な符合を見せているのである。

三

月一日の東日本大震災は、そのとてつもない猛威で日本を揺さぶった。津波は東北太平洋沿岸を飲み込み、日常の風景をがれきの海に変え、日本をマヒさせた。そして何よりも象徴的だったのは、東京電力福島第一原発の見るも無残なありさまだ。経済成長こそが幸福だと信じるGDP神話に固く呪縛されたこの国の経済システムは、絶対の安全を謳う原子力発電を求めた。しかしそれがウソにすぎなかったことは、もはや誰の目にも明らかだろう。

これまでのように、人間の手に余る原子力にすがってまで、モノとカネの豊かさを追い求めることはもうできない。「3・11以後」を、過去からの単純な延長線上に構想することは、震災で命を落とした人々を軽んじるだけでなく、未来世代への犯罪でさえある。

これからの世の中はどんな姿が望ましいのか。幸福が過剰な便利さやモノの豊かさの先にはないとするれば、どこに求めればよいのか。地球全体を席卷するグローバルゼーションは巨大企業の利潤最大化だけを追い求め、コミュニティを破壊し、資源を浪費し、気候変動を促し、人々の生活を破壊させる。本作品の監督の一人で、インドのラダック地方に入り、その文化や人々の暮らしを綴った著書『ラダック 懐かしい未来』で知られるヘレナ・ノーバーク・ホッジさんは、解決への糸口として「ローカリゼーション」を提唱する。それはグローバルゼーションのエトスである経済成長神話とは全く逆の方向、つまり人の手を離れて膨れ上がってしまった経済を、私たち一人ひとりの手の中にもう一度取り戻す「経済のローカル化」を志向するものだ。



『幸せの経済学』

監督：ヘレナ・ノーバーク・ホッジ、ステイブン・ゴリック、ジョン・ページ
2010年/英国/68分
●5月22日（日）「国際生物多様性デー」、公開を記念して全国100カ所です自主上映会。詳細は<http://www.shiawaseno.net/100-2>
※劇場公開は、現在調整中。
その他問い合わせは、ユナイテッドピープル <http://www.shiawaseno.net/contact>

週刊金曜日 2011.4.15 (843号)